クーデター

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クーデター

【Ｎコード】
Ｎ５８８３Ｉ

【作者名】
天川充

【あらすじ】
偽善をテーマにした初の本格ミステリー作品。頭脳明晰の主人公が恋人と協力し、組織の機能を崩壊させていく。偽善とは何なのかを問うのがテーマ。人間の悪の部分を掘り下げている。各所に用意した伏線が最後にどうつながるのかも見もの。

1

1

東大の合格発表当日、父の訃報を母から受け取った。会社の屋上で首を吊って死んでいるところを発見されたらしい。おそらく自殺だろう。それはあまりにも突然のことで目の前にある自分の番号を見ても何か虚しくて空っぽになった。いつも偽善と偏見に満ちたこの国を変えてやると意気込んでいた正義感の強い父の姿はもうここにはない。雄介の目には涙が落ちることはなかった。その場で高笑いをあげては父を軽蔑し、自分はああはならないと誓ったのだった。

それからは誰ともかかわらず周りが遊んでいるときに勉強することを惜しまなかった。父がこの国を変えるほどの力がなかったのは中途半端な学歴と才能、そしてプライドのせい。世の中は自分のための優しさを振りかざす偽善者と、自分たちを正当化したいがために劣ったものを卑下する偏見で満ちている。だがそれは同時に弱者が排除される社会でもある。父は強者という立場になれなかったのに上の権力と戦った結果、敗北した。

雄介はそんな父を反面教師にし、トップに立つことを目指した。その結果学年二位にまで上り詰めた。学年一位は森一哉。入学試験を主席で突破したという本物の天才で、努力で上り詰めた雄介とは正反対の男だ。自分のために偽善で近寄ってくるクラスメイトに見切りをつけ孤独を貫いていた雄介とは逆に、多くの友達に囲まれ持ち前の明るさを放っていた。

そんな森が雄介は嫌いだった。体育会系で精神論ばかり並べ、楽天的。何より自分を押し殺してまで周りに合わせる偽善ぶりは雄介のもっとも遠ざけたい人物だった。学校のやつらは森と雄介を二人の天才と称するが、比べてほしくない。何でもかんでもやれランキングだ、やれ学歴だ、隣の誰々は・・・などと比べたがるのがこの

国の欠点のひとつだ。希望の芽を摘むことになるとどうしてわからないのか。
「どうかしたの？思いつめた顔して」
「いや、別に」
「またそうやって隠し事しようとする。だからみんなに陰気だって言われちゃうんだよ」
「僕は周りになんて思われても構わない。みのりもそれを覚悟して僕とつるんでるんだろ」
「そうだけど……」
みのりはそれ以上言うのをやめると、黒髪をかきむしり手を振って教室を出て行った。吉川みのりは高校からの同級生で、この国、しいてはこの世界の矛盾に呆れ果てていた。みのりは度重なるいじめから不登校になり、渋谷の町で不良グループに絡まれているところを雄介に助けられた。腐った世の中を変えたい。目的が一致した二人はその後東大を一緒に目指していく過程で、お互いが人間として惹かれていったのだ。
日常で当たり前になっていることにも間違いはあるってどうして人は思わないのだろうか。常識は多数意見であって絶対ではないというのに。雄介は与えられたものをはいそうですかと受け入れるだけの度量は持ち合わせていなかった。ただ自分の信じられるものだけを頼りに理想の世界を創り上げることだけを夢見てここまでやってきたのだから。
陰と陽。雄介と森は対照的だからか常に比較の対象になっていた。三年になってからはゼミも一緒。雄介は何かと森に話しかけられることが多くなった。黒のジャケットに赤のTシャツと女性受けを狙ったかのようなファッションは、ボーダーのTシャツにジーパンとラフな格好の雄介からすると嫌味のようにも思えた。
「今夜飲み会やろうと思うんだけど、お前も来ない？」
人数合わせに暇そうだから誘ってみたとでも言いたげな軽い口調で森は雄介の肩を掴んだ。まともに会話しても埒があかないので、雄

介は受け流すことにしている。
「僕は馴れ合うのが嫌いなんだ。申し訳ないけど、ほかの人を当たってくれないかな」
「そっか。てっきり吉川が来るって言うからお前もついてくるのかと思ったけど」
雄介ははっとしてみのりの姿を探した。森グループの影に隠れるようにいたみのりを見つけては彼女の裾を掴み、教室の隅まで引っ張った。
「何考えてるんだ。みのりだって森たちのこと嫌いって共感してただろ」
「逆の発想だよ。もしかしたら森君の弱点がわかるかもしれないよ」
「森の弱みなんて知ってどうするんだよ」
みのりは怪訝な態度を取る雄介を見て得意げに笑みを浮かべた。
「利用しちゃえばいいじゃん。使えそうもなくいらなくなったら排除しちゃえば」
「……なるほどね。相変わらずみのりは悪智慧にかけては天才的だな。でも本当は単に飲み会に行きたいだけなんだろ」
みのりは声に出さずに不敵な笑みを浮かべると、自ら作り出した人当たりのいいキャラクターになりきって森グループの輪に飛び込んでいった。みのりが説得したと言うと断れず、雄介はしぶしぶ飲み会の約束をＯＫしたのである。

2

2

「ここにいたんだ。やっぱりやめたとか言って逃げちゃったのかと思ったよ」
大学の図書館でレポート作成のための資料を探している雄介に、ピンクシャツとチュニックワンピースを着たみのりが寄ってくる。飲み会のために着替えてきたのだろう。少し柑橘系の香水の匂いもする。
「みのりを放っておくとろくなことがないからな」
「相変わらず信用されてないな、私」
「そりゃそうだろ。みのりは僕と同じでひねくれてるからな。いつ裏切るともわからない」
みのりのふてくされた顔を見て、雄介は眼鏡を外した。本棚に資料をしまうとポンとみのりの肩に手をかける。
「眼鏡かけたほうが絶対かっこいいのにな」
「かけてなくても日常生活には支障はない。森たちの顔がはっきり見えない分好都合なんだよ」
「そんなこと言って、エッチのときもかけないくせに」
「あれは別だ。よく見えないほうが興奮する」
みのりは真面目な顔して下ネタを言う雄介を見て、吹き出すように笑い声をあげた。雄介は図書館の入り口のドアを開ける。
「行こう、急ぐんだろ」
校門入り口には森グループが待っていて、雄介とみのりは森の誘導に従って赤門から先を歩いた。秋の彩をいっそう増した東京の空は黄金色に染まっていて、少し肌寒い。このあたりは高層ビルが多いこともあってか、スーツ姿のサラリーマンも数多くはびこっていた。

森が指をさして立ち止まったのはいかにも安さで学生に人気がありそうというような和風居酒屋だった。中からは香ばしい焼き鳥とビールの匂い、それに学生らしきグループの笑い声がこだましている。雄介たちは店員に案内され、６人がけのテーブルに座った。雄介の目の前に森、森の隣に倉田美幸でその正面がみのり、その隣に佐々木隼人、そしてその正面には奥村美鈴がいる。倉田は森と噂になったこともありかなり深い仲らしいが、付き合ってはいないらしい。綺麗なロングのブロンズヘアーと目元のはっきりした顔立ち、細身で長身。童顔で愛くるしく甘ったるい笑顔が印象的なみのりとは別次元の美人といった感じだ。

佐々木は父親がＩＴ企業の社長で自分が世の中で一番だと勘違いしている大バカヤロー。今日も高級なだけでバランスの取れていない革ジャンとローライズのパンツ、さらに金色に輝いたロレックスの腕時計を見せびらかせている。何でも自分中心で考えるところがあり、雄介とみのりは森とは違った意味で軽蔑していた。贅沢ばかりしているせいか、明らかな肥満体型で全てお金で解決するところがある。

奥村はなぜ森グループにいるのかわからないくらいに異質の雰囲気を醸し出している人物だ。ショートヘアーに小柄な体型。ミッキーマウスのプリントされたトレーナーとベージュのミニスカートが妙に似合っていた。無口で心を開こうとしないせいか、森に弱みを握られているという噂もある。雄介からしてみれば森グループの中では唯一まともな人間といったところ。うまくいけばこちら側に引き込み利用できるとも考えていた。

「羽鳥はどうする」

「僕の名前を気安く呼ぶな」

雄介は森との視線をそらしながら頬杖をつく。流し目でみのりに訴えていた。森と一緒にいるというだけで虫唾が走る。雄介は人として生理的に受け付けなかった。

「雄介は生中でいいって。トマトが嫌いだからトマト系はＮＧね」

みのりは笑顔で答えていたが、雄介にはそれがたくらみであることを知っていたから逆に不気味に映っていた。相手によって顔色を使い分けるのはみのりの得意技だ。

「しっかしさ、この人嫌いの羽鳥のどこが気に入ったんだ？たしかに頭はいいけど、仲間は作らないってオーラ漂ってんじゃん」

「一哉君、そんなはっきり言わなくても」

倉田が森をなだめている間にみのりが軽く舌打ちをしたのを雄介は見逃さなかった。みのりは人の好き嫌いが激しくて、普段は雄介の前でだけ素を見せる。怒らせると怖い一面も持ち合わせていた。

「雄介はね、あんたらと違って本当の意味での優しさを知っている。何が必要で何が正しいのかちゃんと判断できる人。あんたたち見せかけの優しさとは違うんだよ」

みのりは泣きそうなのをこらえながら周囲の目を気にせずとがった口調で言った。普段雄介の前でしか見せない素の姿も雄介のこととなると周りが見えなくなってしまうのだ。森グループはそのギャップに戸惑ってか呆然としていた。

「じゃあさ、その優しい羽鳥のために吉川は何ができるって言うんだ。その優しさにただ甘えてるだけじゃ偽善と同じじゃないのか。吉川は偽善じゃないこいつのことが好きって言ったよな？俺らをそこまで否定してるんだから当然吉川自身も偽善じゃないって言えるんだよな」

「ちょっと一哉君、そんな言い方は」

「美幸はちょっと黙ってろ。これは吉川が仕掛けてきた喧嘩なんだからさ」

佐々木と奥村は傍観者といった様子だ。みのりはたまっていた鬱憤を吐き出すように見下した表情で森を見ている。

「森ってホント、頭いいくせに何もわかってないんだね。別にあんたにわかってもらわなくても構わない。それとも何？あんたに認めてもらうことが全て正しいとでも言うの？だったら証明してやるよ。今この場で」

みのりは森の目を睨み付けるように涙まじりで充血しきった目をこすってワンピースの左肩、右肩と下ろしていく。ワンピースがほぼ完全に落ちたところで今まで静観していた雄介がみのりの肩を掴んだ。

「そのくらいにしておけ。警察へ通報されてる」

雄介があごでカウンターを指すと、店員が事態を重く見たのか電話越しに声を荒らげていた。雄介はみのりのワンピースを拾い上げると立ち上がり、涙ぐむみのりを胸で抱きしめた。ジャケットをみのりにかけ財布から一万円札を一枚取り出し、テーブルに叩きつける。

「悪いが、僕たちはこれで帰る」

「……なんだかいろいろ悪かったな」

森も少しは反省したのか、顔をしかめたままぼそぼそと告げた。森グループも傍観していたのだから同罪だ。雄介とみのりに目線を合わせようとはしなかった。雄介はそこに冷たい視線を送る。

「お前たちがどう思っても構わないが、このままだと絶対に後悔する。覚えておくんだな」

雄介はそう捨て台詞を吐いてみのりを抱えたまま店を出た。

「みのり、大丈夫か」

「うん。ごめん、私が強引に連れてきたのに……」

雄介は自分から離れてワンピースを着直すみのりに目線をそらしながら鼻をすすった。

「だから僕は最初に言ったんだ。あんなやつらと交流したって何の得にもならないって。いくら頭がよくても人間として大事なものを失くしてしまったらおしまいだ」

みのりはさっと着替えを済ませると、なにかたくらんだような不敵な笑みを浮かべていた。

「あいつらがサイテーなのはわかってる。だけどまったくの無駄じゃなかったと思うよ」

「ということは弱点がわかったのか？」

みのりは誇らしげな笑みで大きく頷いた。
「前から思ってたことなんだけど、今日ではっきりした。あのメンバー、ホントに仲良しだと思う？」
「仲がいいからいつもつるんでるんじゃないのか。たしかに奥村だけは違うような気もするが」
「奥村さんは弱みを握られてるだけで、やろうと思えばこっち側に引き入れられる。そう雄介は言ったよね？だけどそれだけじゃないんだ。今日の一件のとき佐々木も傍観者として一言も発しなかった」
「それは空気を読んで入り込めなかったからじゃないのか」
　みのりは首を横に振る。
「私も最初はそう思った。だけどあの一番目立ちたがり屋の佐々木がそんなこと考えると思う？これは私の仮説なんだけど、佐々木も同じように仕方なくつるんでるんじゃないかな。そして、本当の意味で森の友達と言えるのは倉田さんだけ」
「倉田はあの状況の中で森を止めにいっていたしな。それで倉田があいつの弱点というわけか」
　みのりは酔っ払いの中年サラリーマンが道狭しとはびこる中、堂々と雄介に抱きつく。涙が乾き落ちた化粧を手で拭いながら。
「二人で森に復讐してやろうよ。最悪な世の中にクーデターを起こす第一歩として」
「……復讐か。悪くないかもな。ただやるなら足がつかないほうがいい。捕まってしまったら世の中を変えることなんて夢のまた夢だ。二人で一番いい方法を考えるんだ」
「雄介と私の頭脳があればきっとできるよね」
　雄介は深く頷き、抱き寄せる体を引き寄せてさらに強く抱きしめた。誓いの夜を祝うように濃厚な口付けを交わして。

3

3

あの事件から3年が経った今になって3年前に出された手紙が雄介の元に届いた。あの偽善と偏見が大嫌いだった父が初めて息子に向けて書いた手紙はまるでこれから雄介がすることをお見通しとでも言うかのように、託された想いと事件の真実が克明に記されていた。父が自殺に追い込まれてまでやりたかったことを知ったとき、不思議と雄介の中にずっとあった父に対する軽蔑の念はどこかに行ってしまったのである。雄介はそっと手紙とそれと一緒に同封されていたものを誰にも見られぬよう机の引き出しの奥に隠していた。

「へぇ～、雄介の部屋ってこんなになってたんだね」

雄介の部屋に招かれたみのりは辺りを見回した。机に所狭しと積んであるミステリー小説と大学の参考書類の山。正面には薄型のプラズマテレビが、中央に居座る丸いテーブルの上にはノートパソコンとデジカメやプリンターを中心とした周辺機器が無造作に置いてある。

雄介はCDコンポに入っている好きなロックバンドの曲をオンにすると、部屋の鍵を閉め座布団を敷いてみのりを座らせた。今日のみのりはボーダーシャツに水色のコート、そして股上がきれいに見えるショートパンツとラフな格好だ。みのりには着飾った格好よりもこっちのほうが似合う。

「何言ってるんだ。もう何度も来てるだろ」

「そうだけど、いつも夜中にエッチするだけだからちゃんと見たことなかったんだよね」

雄介は照れ笑いをするみのりをよそにパソコンの電源をオンにした。起動するまでの時間に待ちくたびれたのか、みのりはテレビをつけ、お昼のバラエティ番組を見ながらスナック菓子をほおばっている。

パソコンが立ち上がると雄介は文書を開いた。そこにはずらりと箇条書きされた計画書が記載してある。
「この一週間、僕がまとめたデータだ。みのりとの会話の中で使えそうなものもピックアップしといた」
口の周りについたスナック菓子のかすをティッシュで拭い去ると、みのりはパソコンの画面にかじりついた。
「すごい。これ全部考えたの？」
「使えそうもないのも含めて四十ある。僕としては悪趣味なものは避けたいのだが」
「というよりこの倉田さんを……ってのホントにやったら私はキレるよ」
「……心配するな。僕は別に性欲に飢えてるわけじゃない」
雄介は不必要と思われる項目を次々と削除していく。確実に足がつかず、なおかつ森に精神的なダメージを最も与えられる方法を求めて。そして、最後に辿り着いたのはみのりの発言から思いついたものだった。
「やっぱりこれがいいよね。あいつらが裏切らないことが前提だけど」
「それなら裏切る前に手を打てばいい。それは多くの人が今まで取ってきた手段だ。問題はない」
雄介はもうひとつのファイルを開き、ある人物のプロフィールを指差した。
「みのりには今から僕が言うことを実行してほしい。こいつは単純だ。必ず引っかかる」
雄介はみのりに耳打ちをして最初の作戦を伝えた。みのりも納得したようで笑いをこらえている。二度聞きして完全に頭に入れると、みのりはメモリーに入っていたその人物に誘いのメールを送っていた。

翌日。晴れ渡る秋空の中、渋谷のスクランブル交差点交番前で黒

のタキシード姿の男が立っている。男はケータイと睨めっこしながら着信が入るのを待っているようだ。待ち合わせの人を探すように辺りをきょろきょろしていた。そこに真っ黒なドレスに赤いスカーフを羽織った女性が現れた。
「ごめん、ちょっと遅れちゃったね」
「いやいや、全然大丈夫。そんなことより吉川から誘いが来るなんて思わなかったからびっくりしたよ。頼みたいことって何？」
「それはゆっくりランチでもしながら話そうよ。こればっかりは雄介には頼めないからさ」
　みのりは男に向かってお得意のぶりっこでかわいらしさを強調している。男は鼻の下を伸ばしながら斜め下目線でみのりを見ていた。
「すぐそこの駐車場に車停めてあるんだ。乗ってかないか」
「もちろん乗らせていただきます」
みのりは首を横に傾けて笑顔を作っていた。
　五分ほど歩いたショッピングセンターの裏の立体駐車場に一台だけ場違いなベンツが停められていた。男がキーを操作するとおよそ数メートル先のドアのオートロックが解除される。男は得意げな表情でみのりと目を合わせた。
「親父に誕生日プレゼントに買ってもらったんだ。まだ数回しか乗ってないんだけど、今日のために乗ってきたんだ」
「そうなんだ。佐々木君ってお金持ちなんだね。私、お金持ちって大好き」
「そ、そう？それは嬉しいなぁ」
　みのりは無表情で浮かれている佐々木に対して声を与えていた。佐々木はノリノリで深い相槌を打つ。速度は佐々木のテンションの高さを物語るように上がっていき、高速道路上を走る頃には百二十キロをゆうに超えていた。あまりの速さにふらふらになりながら降ろされたのは佐々木のいきつけだという高級イタリアンレストラン店だった。
「どう？スリリングなドライブは楽しかっただろ」

「……ええ、とっても」
みのりは空気の読めない佐々木にむっとしながらも笑顔を崩さなかった。向かい合わせにテーブルに座ると、佐々木はカルボナーラ、みのりはペペロンチーノを注文する。
「吉川は偽善って何だと思う？ほら、この間言ってたじゃんか。羽鳥は偽善じゃない優しさを持ってるって」
みのりは運ばれてきたコーヒーをすすりながら佐々木に目を合わせた。
「俺さ、あれ聞いてて思ったんだよ。偽善じゃない人なんていないんじゃないかって。世の中にはいなくなってほしいやつもいるけどさ、そういうやつに敵意剥き出しでいるわけにはいかないだろ。誰にも好かれるようにしてなくちゃ世の中渡り歩いていけない。何でも思ってること吐き出して排除されるくらいなら俺は偽善者になることを選ぶぜ」
「……だから？」
　みのりのこの日初めて見せる冷たい視線に佐々木は一瞬びびっていたが、勢いづいた口は止まることを知らなかった。
「だからそんな口先だけの羽鳥なんかやめてさ、俺と付き合わないか？俺ならお金もあるし絶対羽鳥よりも幸せにできる自信がある。実を言うと俺、一目見たときからちょっといいなと思っててさ……」
ようやく届いたパスタを一口ほおばると、ペーパーナプキンで口の周りを拭き取りみのりは佐々木に顔を近づけた。
「……いくら出せる？」
「それって」
「勘違いしないでよ。私は価値観の違う人と付き合うつもりはない。だけど条件とお金次第でひとつだけ要件を飲むって言ってるの」
　佐々木は状況を飲み込めたのか、渋った表情で本題に入ったみのりの顔を見つめていた。
「その……、頼み事って何なんだ？本当にひとつ用件を飲んでくれるんだろうな」

「うまくやってくれればね。用件は終わった後成功報酬として聞くよ。私は逃げないから心配しないで」
不敵な笑みを見せるみのりに数秒の間佐々木は気圧されて苦笑いを浮かべていた。完全にみのりのペースに巻き込まれ、立ち込めた空気は石よりも重かった。
「わかった、信用するよ」
みのりはその言葉を待っていたかのようにその場で佐々木に耳打ちした。雄介に告げられた伝言を。佐々木はみのりの言葉を聞き終わると青ざめ、みのりに対して恐怖心さえ抱くようになっていた。

時を同じくして雄介は新宿駅東口交番前で人を待っていた。黒の薄手のコートにVネックのシャツに革のパンツと着慣れないファッションで。時計は午後六時を回っている。そろそろサラリーマンが鞄片手に飲みに出向く頃合だ。歌舞伎町方面に向かう人たちでごった返してくる。
「突然呼び出してすまない。メールでも言ったが、奥村に話があるんだ」
「……何？」
奥村は警戒心を剥き出しにして雄介を睨んでいた。まるで自分がなぜ呼び出されたのかわからないという表情で。革ジャンのポケットに手を突っ込んで雄介を下から見上げている。ミニスカートからのぞく素肌が寒いのか、少し足が震えていた。
「こんなところで立ち話しても寒いだけだな。少し飲みながら話そうか」
そう言う雄介の言葉に頷き、歌舞伎町方面に向かって歩く雄介を警戒しながら後ろからついてくる奥村の姿があった。雄介はそれを一度振り返り確認すると、行きつけのお店へ最短ルートを辿って歩いていく。
立ち寄ったお店は二十席ほどのこぢんまりとしたコマ劇場の裏にある焼き鳥をウリとする居酒屋だった。客層は二十代前半から三十

代前半の若手サラリーマンが中心だ。その中に紛れてオヤジの相手に疲れたＯＬの姿も目を引く。雄介たちは周りが最も静かと思われる一番奥の二人掛けのテーブルに腰掛け、生中２つと適当な焼き鳥を１つずつ注文した。

「この間は散々だったからな。今日は僕がおごるから好きなものを頼むといい」

「……どういうつもり？」

奥村はうつむいたままぼそっと呟く。心なしか奥村の肩は震えていた。なぜここに自分がいるのかわからないといった表情だ。

「勘違いしないでほしい。僕は君が想像しているように下心でここに呼び出したんじゃない。そもそも僕にはみのりがいるからね」

「……じゃあなんで」

奥村は裏返った声で叫ぶ。これまでこれといった交流もないのにいきなり二人きりで呼び出されたことに動揺と怒りを隠しきれずにいた。雄介はうつむく奥村の様子を見て表情を崩さないまま心の中で笑みを浮かべる。

「僕は奥村のような人がなぜ森とつるんでいるのかずっと疑問だった。確かに性格の違う者同士が仲良くなることだってある。だけどそれはお互いのいいところを認め合い、マイナスよりもプラスが上回った場合だ」

「……何が言いたいの？」

雄介はその言葉を待っていたかのように鳥皮を一本食べてビールを一口飲むと、顔を上げた奥村の目を見て続けた。

「調べさせてもらったよ。君の父が起こした事件のことを。君の父は当時企業の隠ぺい工作にかかわっていた。警察は何の疑いもなく報道はされなかったが、もしこのことが世間に知れれば責任追及、そして刑罰は免れない。絶対に誰にも知られてはならない秘密だった。君はそのことで必要以上の言葉を封印することを選んだ……」

「……やめて、お願い」

奥村は頭を抱えて涙を浮かべていた。まっさらにされた少女はそ

の場で仮面が剥がされたようにあどけない表情で雄介に嘆願する。
雄介は子供をあやすように優しく奥村の頭を撫でた。
「僕は君を貶めたいんじゃない。むしろ救いたいとさえ思ってる。おそらく森にこのことを知られ脅されたと僕は考えてる。違うか？」
奥村はうつむいたまま縦に首を振った。雄介は奥村にハンカチを渡す。
「君にはわかっていたかもしれないが、僕とみのりは森が嫌いだ。今調子に乗っているあいつをこらしめようとしている。奥村も僕ら側について協力してくれないか？もし成功すれば君は森から解放される。断る理由はないはずだ」
奥村は枯れた涙を拭い雄介の目を見た。ネギマを一口ほおばると、奥村はこの日初めての笑顔を見せていた。白い歯を剥き出しにしながら。
「私もあの人は嫌い。できることなら協力するよ。信じて、いいんだよね？」
「もちろんだ。君が裏切らない限り僕は君に不利益になることはしない。メールや電話だと足がつく可能性があるから今この場でやってほしいことを伝える。一度しか言わないから頭に叩き込んでほしい」
　奥村はにっこりと笑みを浮かべ、ビールを飲みながら雄介の言葉一つ一つを脳裏に焼き付けていた。雄介は誓いの印として龍をモチーフにしたピアスをプレゼントすると、裏で起こすことを伏せ必要最低限のことだけを伝える。万が一情報が漏れても自分に害が及ばないようにするためだ。店を出る頃にはべろんべろんに酔っ払った奥村をタクシーで送り届けると、雄介はすぐにみのりに連絡を取りホテルでお互いの情報交換をしていた。

4

4

「倉田がいなくなって一週間か……。一哉、何か連絡入ってないのか？」
「な～んにも。こっちからメールや電話しても電源切ってるみたいで繋がんねぇよ」
「一哉が連絡取れないんじゃ俺なんかが連絡したところで無駄だよな」
ゼミが終わった後の教室では一週間前に失踪した倉田美幸の話題で持ちきりだ。警察に捜索願は出されたが一向に手がかりは掴めずにいた。一週間たった今大学構内には張り紙が出され、家族から二百万円の懸賞金も賭けられている。倉田と一番親しかった森はひっきりなしに学校中の生徒や教授、警察から取調べを受け手がかりが掴めないことにやきもきしていた。それでも森のポジティブで能天気な性格は相変わらずで、心無い返事をするばかりであった。
「……あ、あのね森君、ちょっと」
「どうしたんだ、奥村。そういやこのところずっと泣きそうな顔してるよな。お前も心配なんだよな」
奥村は浮かなそうな顔をして自分のケータイの画面を開いて森の目の前に差し出した。そこには倉田と一緒に楽しそうに笑っている写真が映し出されていた。
「……これって」
「一週間前、原宿に二人で遊びに行ったときに撮ったんだ」
「詳しく聞かせてくれないか」
森は最大の情報源になるかもしれない奥村の話に耳を傾ける。話下手の奥村はゆっくり聞かれるがままその日一日の様子を言葉にした。一週間前ちょうど失踪当日となったその日、奥村は倉田を初め

て自分から誘い原宿でショッピングした。そこでは森たちにどうしたらなじめるのかのアドバイスを倉田からもらうなど倉田がお姉さん的存在としてリードしていたらしい。イメチェンを図ったファッションに着替えた記念に二人で撮った写真がこの写メである。
「それでそのとき美幸におかしなことはなかったのか」
「そんな様子は何もなかったよ。……ご飯最後に食べて私がトイレに行ってる間にいなくなっちゃって。店員さんに聞いたら私の分までお金払って先に帰ったって」
「結局手がかりなしか。ちくしょー」
森は結局振り出しに戻った倉田の行方に対して頭を抱え、机を思いっきり一発殴った。そこへみのりが目の前に駆けつける。みのりは慌てていて血相を変えたように冷や汗をたらしながら森の手を握った。ファーの付いた白いダウンジャケットの胸元から星をモチーフにしたネックレスが光り輝いているのが見える。
「ちょっとこっち来て。雄介がすごいの見つけたの」
みのりは森の手を引っ張り、眼鏡をかけて黒いパーカーを着て机の上でパソコンを開いている雄介に目線を移した。パソコン画面に向かっている雄介の顔は真剣そのもので、いつも以上にシャープに切れ上がったあごが事の深刻さを物語っている。
「羽鳥、どうしたんだよ。深刻そうな顔して」
「……覚悟してみてほしい。もちろんここに書かれていることは根も葉もない噂だが、その度合いは人間の醜さそのものだ」
「何が映ってるって言うんだよ」
森は雄介を跳ね除け、開かれたパソコンの画面を見た。そこには大学に張り出されている倉田美幸の写真とともに失踪に関するでたらめな憶測による誹謗中傷合戦が繰り広げられていた。中には失踪とは何の関係もない卑猥な言葉も含まれている。
「……な、なんだこれ。まるで失踪した美幸が悪いみたいじゃんか。それに性的なおもちゃにされてる」
「僕も発見したときは驚いた。この写真を掲載してるあたり、この

サイト自体はこの大学の誰かが情報を求めてかはわからないが開設したサイトみたいだな。ＢＢＳに書き込みをしているのはまったく別の一般人ということになる。２ちゃんねるを見ているものならわかると思うが、ネット上の掲示板はおおむねこのように誹謗中傷の言葉が並ぶことが多々あるんだ」

さすがに落胆を隠せない森に対して雄介は冷静に分析した事実だけを突きつける。森はこれ以上見ることに耐えかねたのか、席を立って佐々木の肩に身を預ける。そこへ雄介はパソコン画面をさらにクリックしていく。

「ただ本当に見てもらいたかったのはそれじゃないんだ。これを見てほしい。倉田の居場所の手がかりになるかもしれない」

森はその言葉に再び雄介側に顔を向けると、パソコン画面に目を移した。そこには倉田美幸本人と名乗る人物からの書き込みが書かれていた。他の投稿者から批判を受けながらもそれをスルーして数件に渡り現状や事件などについて綴られている。

「これを見る限り倉田は事件に巻き込まれたみたいだな。誰かに連れ去られたと見て間違いないだろう。もしこれが真実だとしたらこれを書き込んだのは倉田本人ではなく犯人側ということになる。いくらなんでも本人に助けを求めさせるようにパソコンやケータイを近くに置くわけがない」

森は初めて辛そうな表情で雄介の胸倉を掴み上を見上げる。

「なあ、美幸は大丈夫なんだよな。俺、こんな性格だからうまく言えないけど、美幸はいつも俺の傍にいてそれで当然だと思ってた。だけど今回いなくなってやっとわかったんだ。俺にとってあいつは何よりも大切なんだって。あいつがいなくなっちまったら俺、俺……」

涙声で訴える森を雄介は無表情で眺めていた。後ろにいた佐々木がポンと森の肩を叩きにっこりと笑う。

「行こうぜ、一哉。今日はベンツってわけにはいかねぇけど、コルベットが駐車場に停めてあるから乗せてってやるよ」

「……いいのか？」
「この仮は高くつくけどな」
佐々木は初めて見せる弱さをさらけ出す森の体を抱きしめた。雄介はみのりに顔を移す。
「僕たちも後から追いかける。頭の切れる相手かもしれない。無理はするな」
森と佐々木は縦に首を振ると教室を出て走り出した。雄介は再び机に座ると、パソコン画面に映し出されたサイトを削除する。準備完了。雄介とみのりの脳裏にはこれから動き出す物語のルートが描かれていた。

5

5

公道を抜けて一時間ほど進んだ東京の外れの工場の廃墟が掲示板で記された場所だった。森と佐々木を乗せたベンツは手前百メートルほどのところで動きを止めた。二人が警戒心を剥き出しにしながら辺りを見回すと、くっきりと中に人が出入りしていると思われる痕跡が遺されている。

「一哉、ここからはお前一人で行ってこいよ。俺はここで待ってるから」

「お前がそんなこと言うなんて珍しいな」

「なに言ってんだよ。お前がピンチになったときに颯爽と現れて助けに行ったらかっこいいだろ？」

「お前らしいな、安心したよ」

森は小声でありがとと呟くと一気に走り抜けていった。佐々木は森が完全に視界から消えたことを確認すると、すぐにケータイを取り出しみのりに電話をかける。

「……これでいいんだよな？」

「うん、ありがと」

「本当に要件は飲んでくれるんだよな？だったら俺の願いは……」

「ちょっと待って。そのことなら彼が説明してくれるから」

「……彼？」

佐々木が電話越しに戸惑いを見せている間、どこかのロックバンドの着うたが流れる。ほんの数秒の間でも佐々木には長く感じられただろう。みのりに代わって電話に出たのはいつもそこにいる男だった。

「よくやってくれた。僕からもお礼を言うよ」

「……その声は、羽鳥か」

雄介は佐々木の問いかけには答えず電話越しに不敵な笑みを浮かべていた。雄介には自分が出た時点で佐々木が焦りを感じることは計算済みだ。畳み掛けに入るのは至極当然のことだった。
「どうやらみのりが余計な約束をしてしまったようだな。何でも成功報酬としてひとつだけ要件を聞くとかなんとか……」
「それのことなんだけどよ、なんか羽鳥の声聞いたらどうでもよくなっちまったというか」
その言葉を聞くと雄介は心の中で笑い声を上げていた。全ては思惑通り。僕の計算が狂うことはない。雄介はこの状況を楽しんでいる。
「これだけのことをやってくれて何もしないというのは僕の気が済まないな」
「……それじゃあ」
佐々木が態度を翻し、明るい声を上げる。雄介はそれを想像するのが楽しくてついに電話越しに嘲笑の声を漏らした。
「勘違いするな。お前ごときにみのりを渡す気はない」
「そりゃそうだよな。だったら代わりに……」
「そうだな。代わりに僕と森の前から消えてくれるというなら危害を加えないことを約束する。もちろん今回の件を黙ってるという条件付でだ。もし漏らすようなことがあったら明日はないと思うんだな」
佐々木は雄介のその言葉を聞くとすぐに電話を切っていた。自分を中心に回ってると勘違いしている男にも雄介には勝てないとでも思ったのだろう。完全に上から目線でものを言う雄介の気迫に折れたのだ。雄介は後ろを振り向いてみのりに向かって笑みを浮かべ、ピースしていた。

森は犯人の罠かもしれないと警戒しながらいくつかの足跡を追っている。一週間も経っている。それなのに足跡があるのは本当にここに倉田が連れ去られたと仮定すれば、犯人もしくは倉田自身が出

入りしているということは誰にでもわかった。今の森にはただここに倉田がいると信じるほかない。
シャッターは閉じていて正面から入ることはできなかったが、裏口が開いていた。そっと足音がしないようにすり足で忍び込むと、電気も点いていない真っ暗な作業場に辿り着く。窓はカーテンで覆われていてそれが太陽の光を遮っているようだった。森はケータイのバックライトで探索しながら奥へと進んでいった。
階段付近を探索したとき、森はそこに落ちていたものにはっとして手に取り匂いを嗅いだ。
「……これは美幸の」
手に取ったマフラーはたしかに行方不明になる直前倉田に会ったときに巻いていたシルクのマフラーだった。かすかに倉田の香水と肌の匂いが残っている。森はこの上に倉田がいることを確信し、一歩ずつ進み続ける。
周りを警戒しながら辿り着いたのは最上階だった。積み重ねられた木箱を掻き分け進んでいった奥に猿ぐつわで縛られ気絶している人影を発見する。倉田美幸だ。森は猿ぐつわを解き、倉田を叩いて起こそうとする。埃によって汚れてはいたが、倉田の体はほぼ無傷に等しい状態だ。森が必死に名前を連呼するのに応えるように、倉田は眠りから覚める。
「美幸、大丈夫か？」
「……一哉君？嫌…嫌……こっち来ないで」
「どうしたんだ、俺がわからないのか」
倉田は森を突き飛ばして森が一歩近づくごとに一歩後退して距離を取ろうとする。倉田は瞳孔を見開き青ざめた表情で森を拒絶していた。まるで何か怖いものでも見たかのように後ずさりをする。倉田が後ろに窓しかないことに気付くと動きを止め、来ないでと叫ぶ声に森もその場で立ち止まった。
「何だってんだ。もう大丈夫なんだぜ。心配しなくていい。誰がこんなことしたのかわからないけど、俺が来たからもう安心だ。絶

対美幸を守ってみせる。だから……」
森が手を差し伸べると、倉田は首を横に振って手をはたいた。涙目を浮かべ声にならない声を発すると、今度ははっきりと森の耳に届く声で言葉は向けられる。
「……信じてたのに。どうして？どうしてこんなことするの」
「ちょっと待って、どういうことだよ。こんなことって？」
「しらばっくれないで。ここに連れてきたのもこうして私がここにいるのも全部一哉君が仕組んだことなんでしょ？」
倉田は森に対して冷たい視線を送る。唇を噛み締めて整った精錬された顔立ちは鬼の形相へと姿を変えていた。その顔に耐え切れないという表情で森は倉田が目を逸らした一瞬の隙をついて倉田の体を離さぬようがっちりと抱きしめた。
「どうして……どうしてそういう顔をするんだ。俺には美幸が何を言ってるのかわからないよ。俺はただここに連れてこられた美幸を助けにきただけ。それ以上もそれ以下もない。俺、わかったんだ。俺には美幸のことが必要だって。だから、一緒に帰ろう」
森が必死に今まで見せたことないような優しい笑顔で見つめる姿に倉田は苦痛の表情を浮かべ、痛いと言って緩めた体を突き放して窓を全開にした。吹きすさぶ北風が肌に突き刺さる。
「だったら……だったら教えてあげる。私が一哉君に何をされてきたのかを。一週間前のあの日、美鈴とお店にいたとき私は知らないアドレスからメールを受け取った。無視しようと思ったんだけど、無視したら知ってる情報をネット上にばら撒くって脅されて路地裏に呼び出された。そしたら後ろから押さえつけられて薬をかがされて私はここに連れてこられた。多分睡眠薬かクロロホルムみたいなものだったと思う」
助けられなかったこととその場に居合わせることができなかった悔しさから森は言葉が出なかった。もちろんここからどうして自分に疑いがかけられているのかも見当すらつかない。ドキドキという胸の高鳴りを抑えながらただ倉田の言葉ひとつひとつを受け止める

ほかなかった。
「どれだけ時間が経ったのかわからないけど、目が覚めたときは真っ暗で猿ぐつわで縛られていて身動きが取れなかった。そのうちに声が聞こえたわ。一哉君と知らない男の人の声だった。そのとき一哉君は言ってた。私でお金儲けするために私に近づいてやっとここまで来たって」
森は倉田の一言を聞いて愕然とした。身に覚えがないことで責められている。それももしそんなこと言っていたとしたら人間として最低だ。言葉が出なかった。
「俺は…俺はそんなこと言ってない。信じてほしい。俺のことどういう人間か、美幸が一番わかってくれてるはずだろ」
「私も……私も最初はそう思ってた。今まで一哉君には何度も救ってもらったし、一緒にいて楽しかった。正直言って好きだったわ」
「俺も……俺も美幸のことが好きだ。今回のことではっきりわかった。俺にとって美幸はものすごい大切なんだって」
この場を乗り越えられる。そう思うと森からは自然と笑みが零れていた。しかし美幸から放たれたのは笑顔ではなく、辛く厳しい視線だった。
「……だけど私にはもうあなたの言葉は何一つ信じられない。一哉君が私の目の前で私の秘密を話していたから」
「……秘密って？」
「とぼけないで。誰にも知られたくなかった。だから親にも友達にも言えず、一哉君にだけ話してた。それを平気で第三者に話していた。それが許せなかった。裏切られたと思ったわ」
倉田は怒りを露にしながらも大粒の涙を流していた。体は震えている。寒さよりも心の動揺が嗚咽を伴う痙攣を引き起こしていた。
「美幸、それは何かの間違いだ。俺はそんな軽々しく秘密をばらすようなことはしないし、金儲けのために利用するようなこともしない。とにかく帰ろう。帰って話を聞くから」
「いや、離して」

森が無理やり掴んで引っ張り込もうとした手を倉田は振り解き離れようとする。その拍子に倉田はバランスを崩し、開いた窓から体を放り出す形で真っ逆さまに転落した。アパートで言えば3階程度に相当する高さではあったものの、落ちたときの衝撃は凄まじいものがあった。森はその衝撃のショックからパニックに陥り、救急車が到着するまでの間その場でうずくまるほかなかった。

6

6

倉田の命に別状はなかったが意識は戻らず、森は重要参考人として警察の事情聴取を受けているもののまるで屍のように沈黙を守ったままだ。佐々木は予定通り姿をくらましているが、この事件の中で誰一人気に留めるものはいなかった。

「こんなに簡単にうまくいくなんてね。まさか倉田さんが落っこちるまでは予想できなかったけど」

みのりは雄介の腕を掴んで周りに聞こえない程度の小さな声で話した。爽やかな満面の笑みで腕をぎゅっと抱きしめている。

「当たり前だ。僕の計算が狂うはずがない。もっとも森に付けていた盗聴器に使えそうな情報があったおかげだがな」

「すっごい自信だね」

「人は自信を持ち過ぎるとミスを犯す。今回にしても万が一僕たちとの接点がばれれば危険だったのだから。偶然がいくつも重なったからこそ、森の心を壊すことができたんだ。過信しないようにしないとな」

雄介からも白い歯がこぼれると、いつにも増して甘えてくるみのりのさらさらヘアーを優しく撫でた。

「だけどこれはまだ始まったばかりだ。偽善と偏見のない社会を作るためにも次の行動を起こさなければならない」

「雄介がそこまで言うってことはもう次を思いついてるんだよね？」

雄介はそう言うみのりの顔を見るなり得意げな笑みを浮かべる。

「ここからは個人ではなく組織を動かしていく。社会を変えようとするのにはやはりより大きなものを壊していかなければならない」

「……ってことは学校？」

「そうだ。次は僕たちの通っている大学を動かす。それには森に行

ったよりもより多くの準備が必要だ」
雄介はそっとみのりの掌に紙切れを握らせる。そこには英数字が書かれていた。
「フリーアドレスのＩＤとパスワードだ。これからこのメールに送るものをみのりのケータイに転送して使ってほしい」
「何に使うの？」
「それはこれからのお楽しみだ。それに関してもこのフリーメールを使って伝える。足がつかないように、単なる防衛手段だな」
みのりはわくわくで楽しそうに笑う雄介の考えが理解できず、首を傾げてきょとんとした瞳で雄介のセーターの裾を引っ張りながら見つめていた。

翌日。もうすぐ昼休みの集中力が切れている時間帯だというのに学校中がひとつの話題で持ちきりになっていた。早朝から友達伝いに流れてきた一通のチェーンメール。そこには何人かの教授の秘密が暴露されていた。対象の教授の講義は授業がまったく成立せず中には陰湿な教授イジメに発展することもあった。そのことを恐れてか、次々と掲示板に休講の張り紙が貼られていく。
「うまくいったようだな」
「でもこんなことして何になるの？休みになるのは嬉しいけど」
「これはまだ第一段階だ。今回の一件でみんなが疑心暗鬼になっている。そこを一気に畳み掛けて学生主導の大学に変革させる」
雄介は何か企んでいるような怪しい笑みを浮かべながらみのりの背中をぽんと叩いた。みのりはそれを受けて白い歯をのぞかせながらはにかんでいた。
午後になるとメールの内容は本当なのかという問い合わせが大学側に多数寄せられ、窓口がパンク状態になっていた。ゼミを担当する教授たちは直接抗議の電話を受け取りイライラを募らせる。大学側は緊急の対策に追われ、ついには全学部生を召集しての臨時集会が開かれることとなった。

一週間後に執り行われた集会では噂に呼ぶ噂で広まった風説の流布を信じ込んでしまった学生たちが友達同士で話し込む。やれ学生を自殺に追い込んだだの、やれ女子学生に手を出しただの、やれ研究費を自分のために使い込んだだの、やれ元暴走族の教授がいるだの……。チェーンメールで出回った情報はとてもデマとは思えないようなリアルな描写の文章と鮮明な証拠写真が添えられており、受け取った者はそれが真実だとして疑いようもなかったのである。

「えー、静粛に。只今から学長から説明を……」

「何が説明だ。当事者出せ」

一人の男子学生が声を上げるのに釣られて罵倒は続く。何千という学生の数にはとてもかなうわけもなく、教授陣は次々と問題となる教授達を矢面に突き出す。大学側の立場としては事実を否定するか認めて当事者を見捨てるか。二つに一つしか守る方法はない。学校側に責任がかかるのをできるだけ避けようとするのだ。こういうときだけ個人の問題だと押し付けるように。

雄介はその状況を見て思惑通りと言わんばかりにしてやったりの笑みを浮かべ、隣にいるみのりに耳打ちした。みのりは言葉を受け取ると驚きの表情を浮かべて雄介の横顔を見た。

「そんなことしたら……」

「心配するな。大丈夫だ。僕を信じろ」

みのりは心配そうな表情を浮かべながらも頷いた。雄介は一度深呼吸をすると優等生の表情に一瞬で変え、一歩ずつ壇上に近づいていく。おどおどしていた副学長の制止も気にも留めずに階段を上り、生贄にされた女性助教授の目の前で立ち止まった。

「ちょっといいですか？」

雄介はマイクを女性助教授から奪い取り、学生側に顔を向ける。雄介を知る学生からざわめきの声が上がる。森に次ぐトップクラスの成績を残すことで有名人である雄介が壇上に立ったことでこの瞬間教授達に対する罵詈雑言は納まりを見せた。

「みんなに聞いてほしい。僕も今回の事に関して大体把握している。

正直僕は偽善ってものがこの世で一番嫌いだ。だからもし今回のことがすべて事実だとすれば責任を取るべきだと思う。でも一つだけ。ここは僕の顔に免じてこの場は丸く治めてくれないか」

さらっと言い出したその言葉に館内は静まり返る。矛盾してる、裏切り者、何様のつもりだといった雄介に対する非難の声が鳴り響く。雄介はそんな空気を読もうともせず、声を張り上げて次の言葉をぶつけた。

「僕はただ問題をうやむやにしようとしているんじゃない。これからは僕たち学生主導の講義方針を作る。学生の声を反映させた大学にしていくんだ。もちろん問題に関しては事実確認を取り、事実なら辞めてもらう」

「君っ、学生の身でそんなことを決めてただで済むと思ってるのかね」

「では学長、これ以外にこの場を収拾させる手があるというのですか」

学長は雄介の声に後ずさりをし、しぶしぶ頭を下げて了承せざるを得なかった。雄介は不敵な笑みを浮かべ、壇上を降りると待っていたみのりにハイタッチをした。

7

7

雄介は引き出しから再び父からの手紙を取り出す。父はたまに雄介と二人きりになったとき人類最高の夢の話をしてくれた。人はなんと言っても健康が一番だ。ごくありふれた一言だったが、この手紙を読むことでそのことが理解できる。父は息子に自分の遺志を継いでくれることを心から望んでいたのだ。自然と涙が零れ染みのついた手紙を再度引き出しにしまった。ふと目をこすりながら後ろを見ると、みのりがすやすやと気持ちよさそうな顔で眠っている。

「今度は何やってるの？」

「もちろん次の構想だ。次こそが本番ということになるな」

あの事件から数ヶ月が過ぎ、大学は夏休みに入っていた。大学は学生の思いのままに組まれたカリキュラムに悪戦苦闘し、ボイコットする教授や学生との衝突によるトラブルが後を絶たない。雄介とみのりが描いた偽善のない社会に一歩ずつ近づいている。と同時に秩序ある社会も失われつつあった。

みのりは夏休みに入ってからバイトの時間以外は必ず僕のアパートに来るようになった。半同棲とでも言うのだろうか。茶色く染まった腰の中ほどまで伸びた髪、ピンクで飾られたTシャツとミニスカート。その割にはしているのかしていないのかわからないくらいのナチュラルメイクから覗かせるあどけない顔立ちは明らかに雄介の好みに合わせているといった感じだ。みのりはここに来るようになってから前にも増して雄介に合わせようと魅力を磨いている。

そんな彼女のことなどお構いなしに雄介はパソコンとにらめっこしながらより可能性の高いものへと精度を上げるためにプランを作っている。ネットで過去の事例やミステリー作品を探し、そこから使えそうなものをピックアップ。自分なりに検証し、欠点をどう補う

かを考える。絶対に失敗してはいけない。次のターゲットは今までとはスケールが違い、失敗は死を意味するからだ。
それを覚悟してでも自分が変えなければならない。雄介はいつの間にか使命感にとらわれていた。偏見と偽善のない社会を作る。本当のクーデターはここから始まる。雄介は何かが降りてきたように素早いタイプでプロットを書き上げ、実行に移すために第一の攻撃を投下した。
油蝉の声が鳴り響いている。一週間が経ち、若者の話題はひとつのことで持ちきりとなっていた。待ち行く学生がとあるケータイ画面にかじりついては書き込みをしている。それは『もし日本が自分のものになったらどうするか』という問いかけに賛同したＳＮＳサイトだった。
仕事を探してもどこも雇ってくれないと嘆く若者による日本を自分のものにして変えたいがどうすべきだろうかという問いかけから始まり、たった一週間でアクセス数一日三百万を超える社会現象と化していた。社会、日本、政治に不満のある二十代を中心に、世の中に不安を抱える学生、果てはリストラ対象とされた中高年にまで広がっていく。
ニュースやワイドショーは早くもこの社会現象に食いつき、特集コーナーまで毎日のように取り上げられるようになった。このことに危機を感じたのか、ここ渋谷センター街の街頭ビジョンで緊急記者会見をリアルタイムで放映することが決まり、若者が足を止めている。総理大臣の歪みきった表情がアップで映されると、立ち止まる人々は画面に釘付けになった。
「えー、若者の諸君、こんにちは。どうも携帯電話のサイトで問題が起きているということでこの場で会見を開くことになったようで。昨今インターネットで多々問題は起きているわけでありますが、君たちは何か勘違いしているのではないだろうか。政治の世界を知らないから何もできていないとか言うかもしれないけれど、けしてそんなことはございません。私たちは世の中がもっとよくなるように

尽力を注いでいる。ただどんな物事に対しても賛否両論はあるわけで、それがなかなか実現できていないように見えているのかもしれない。文句があるのなら正々堂々国会議事堂に来なさい。有権者の意見を聞き入れるのも私たちの仕事なのだから。顔も見えないところであーだこーだ悪口ばかり並べるのはよくない」
言葉を濁すような物言いでこの国の首相は会見を後にし、ビジョンは再び流行のミュージシャンの宣伝映像へと切り替わった。その瞬間、ＳＮＳの雑談掲示板に一件新着の書き込みが入る。
『だったら攻め込もうぜ』
そのたった一言に賛同した人々から次々とレスが集まっていく。話は盛り上がりあっという間に決行日が書き込まれていた。そして、渋谷のビジョン前にいた青いＴシャツとつんつん立てた茶髪が特徴的な男が声を上げる。
「おっしゃ、明後日俺らで政治家を降伏させてやろうぜ」
その場に集まった老若男女問わず賛同の声を出していた。雄介とみのりは気のせいか誰かに見られているような気配を感じたが、今はそんなこと気に留めようとも思わなかった。円陣を組んで団結を図る集団の様子を見て、雄介は背中を向けて青になったスクランブル交差点から駅に向かって足を進める。
「これでよかったの？暴動なんかになったら一斉検挙されちゃうんじゃ……」
「いや、これでいい。国家権力の目があっちに向いてくれればしてやったりだな。みのり、一緒に来てくれるか？日本が変わるその瞬間を」
「もちろん。私は雄介と一心同体だから」
みのりは食べていたチョコレートを歯につけながらやわらかい笑みを雄介に対してだけ向けていた。そんなみのりに雄介はそっと手を腰に回して足をゆっくりと前に向けていたのだ。

8

8

雄介は本当に自分がやっていることが正しいのか不安になっている。偽善と偏見のない社会というけれど、今自分がやっていること自体が偽善と偏見そのものなんじゃないかと。このまま嘘を突き通していいのだろうか。そんな不安な気持ちを抑えるために雄介は引き出しを開ける。すると今までそこにあったはずの手紙がなくなっていた。慌てて探すと手紙は一番目立つ机の真ん中に移されていた。封筒の裏を見ると直筆で文字が書かれているのに気付く。

『大丈夫だよ。ずっといつも雄介の心の中には私とお父さんがいるんだから　みのり』

雄介はその文を目にした瞬間涙が零れ、手紙を抱きしめながら声を殺して泣いた。自分を信じてくれる人がいる。ただそれだけでいい。今はそれだけを受け止めるほかなかったのである。

２日後。あまりに直接的に書き込みを行った人は事前に逮捕される報道がなされたが、けして騒動が沈下することはなかった。自称天才を名乗る複数のものからの書き込みにより、暗に作戦は掲示板を見るものに伝えられる。インターネットにはまだまだ盲点があるからこそ悪用され利用される。高度な仕組みを理解している者ならその合間をかいくぐっていくことが可能なのだ。

雄介は霞ヶ関の駅に集まったこれから暴動を起こそうという集団から少し離れたところで必要なものだけを鞄から自分の衣類に仕込み、コインロッカーに鞄を入れる。その中にはいくつか薬品を入れたと思われる小瓶もあった。ここに集まる誰しもがすぐに捕まらないために変装しているため、真夏だというのに皆厚着だ。それは雄介とみのりも例外ではなく、黒いサングラスにパーカーと胸元のぱっくり開いたタンクトップ、膝丈までのデニムパンツとおよそ夏と

冬が同居したような異様なファッションで着飾っていた。
「大丈夫か、みのり。はっきり言って今回は今までのようには行かないと思う。相手は国なんだからな。失敗は死を意味するかもしれない。もし怖かったら手を引いてもいいんだぞ」
雄介は持っていたスポーツドリンクをみのりに渡す。潤んだ瞳をぐっとこらえながら一口ペットボトルに口をつけると、みのりは目をつぶって首を横に振った。
「ホント、雄介は最後まで優しいね。私なら大丈夫だよ。一緒に偽善と偏見のない世界を作るんでしょ？私は雄介がピンチになったら盾になってでも守りたい。万が一死ぬようなことがあったら雄介の手で私を殺して」
鬼気迫る覚悟で上を見上げるように見つめてくるみのりを雄介はぎゅっと両手で包み込むように抱きしめた。二人の未来を約束するように優しくキスをして。ほんの一瞬唇と唇が触れる程度のものだったが、時間が止まったようにそれは何時間にも感じられた。耳元で大好きだよと囁くと体を離し手をつないで雄介のリードで前へと進んでいく。
国会前の門は表も裏も大量の警備員が配備されていて、下手に動いたらあっという間に一斉検挙される状態にある。考えなしに先走った連中はすでに検挙されており、ここに残っているということはある程度冷静な判断と頭脳を持ち合わせた証でもあった。ざっとみて二十から三十人の若者を中心に集まったサイトの住人たち。最初に動いたのはあえてなのかまったく何の用意もなしと思われる黒縁メガネと白のYシャツにジーパンといったラフな格好で乗り込んだ四十代くらいと思われる男だった。男はちらっと目が合ったみのりに対して目で挨拶をする。
「わかった。中に入れ」
なにやらこそこそと話したかと思うと、警備員はあっさりとその男を通した。関係者だったのか。そうその場で待機している誰もが思った瞬間、男は警備員全員に向かって何かを投げつけた。警備員は

すぐさま抵抗することもなく、その場に倒れこむ。男の手はこちらを向いて招いている。
「催眠爆弾か。ここまで即効性が強く範囲が小さいものは初めて見るが」
筋肉質で大柄の男が投げつけたものを手にとって興味深く観察している。ピンポン玉サイズに仕込まれた精巧な爆弾は作成者の相当な技術力が計り知れた。一般的に催眠ガスを要するものというのは一定時間効果を保っておりマスクを使わなければ自爆してもおかしくないのだが、使った相手に効果が出た途端にほかには影響を及ぼさないというものも珍しい。
一致団結して前に進む集団に雄介とみのりは着いていかず、その場で立ち止まった。雄介は上に備え付けられた監視カメラのひとつをチェックする。
「やはりな。連中の中に強力な電磁波を発生させている者がいる。いったん外に出よう。ここではケータイも使えない」
「追いかけなくていいの？このまま一気に叩き込めるんじゃ……」
「僕たちの目的は連中に便乗することじゃない。そもそもいい線はいっているとは思うが、連中の力では国に勝てない。時間の問題だろう」
みのりは戸惑いながらも雄介のパーカーの裾を掴んで走っていくのに着いていくしかなかった。再び駅まで戻ってくると、ロッカーを開けて鞄からパソコンを取り出す。立ち上げると、小さく右端のウインドウが現れて先ほどの連中が映し出されていた。
「カメラ付きの発信機をつけておいた。これなら連中の行動を把握しながら動ける」
「さっすが、雄介。でもこれからどうするの？」
「これから国会中継の電波ジャックをする。全国民、いや全世界の人にわからせるんだ。僕たちがやってることがいかに正しいのかを」
みのりは軽く頷いてケータイを取り出し、ワンセグにつないで国会中継を写す。まだここまで辿り着いていないようでいたって平穏

に討論が行われていた。ただ議員はそわそわと落ち着かない様子だ。明らかに普段より秘書や顧問を装った警備員が多く総理大臣の周りに集まっている。
　雄介は国会中継を流しているＮＨＫを電波ジャックするために次々とプロテクトを外していく。普段相手にしているオタクどもに比べれば一企業のセキリティを壊すことなどたやすいものだ。ものの十分足らずで侵入に成功し、スタンバイができた。
「やばいよ。今連中が突入したんだけど、あっという間に取り押さえられてる」
「やはりか、僕の計算通りだ。こっちも準備は整った。目を離さずに中継を見ていてくれ。僕たちが国を支配する瞬間を」
　雄介はエンターキーをクリックする。ＮＨＫの映像は真っ暗な画面に切り替わり、白い文字でテロップが流される。
『嘘偽りのない世界を創るために今私たちが立ち上がらないでどうするんだ。この国は今日から生まれ変わらなければならない。そのために私が制裁を下すときが来た。私の名は……フェンリル』
そう記されたテロップの後に国会議員ならびに皇室における悪事やトップシークレットが流された。ＮＨＫ側や政治家どもがいまさらあがいて放送をやめさせようとしてもバグデータをそう簡単に消去できるはずがない。止まらない国の最高機関の崩壊は中継中にバックから聞こえる断末魔のような叫び声から伝わってきた。
「すごいね。さすが雄介、あっという間に政府機関を乗っ取っちゃった」
「こうも何もかもうまくいくと自分が怖くなるよ。さあ足がつく前に帰ろう」
「……うん」
　そう思い政府のデータバンクから接続を解除して閉じようとしたときだった。突如逆に雄介側のパソコンをハッキングされ、次の文章が表示される。
『随分好き勝手やってるみたいだね。だけどもうこれ以上むちゃく

ちゃなことはさせないよ。あんたらがやってきたことはすべてわかっている。ケリを着けよう。詳細は後日メールする。　ウォーク』

9

9

雄介にとって初めての誤算。こんなことは初めてだった。今まで多くの挫折を経験してきた。それでもこれほどの屈辱はなかった。自分自身に負けそうになり、再び机に座って手紙を見つめていると後ろから音がした。パジャマ姿のみのりが起きたのだ。

「どうしたの、雄介。眠れないの？」

「ちょっと思うことがあってね。みのりも読んだんだろう？父の手紙を」

「……うん。悪いとは思ったけど、私は雄介のことをもっと知りたかったから」

雄介は封筒に書いてあるみのりの一言を見つめながら数秒間沈黙した。顔をしかめながらみのりにしか見せない暗いトーンで話す。

「手紙を読む前、僕は父が弱いから自ら命を絶ったと思っていた。だけどそれは違った。父は最期まで戦っていた。そのことを知ってから僕は父のように強く戦えるかいつも不安になるんだ。こうして今も自分自身と葛藤してる。本当は自分自身が偽善者そのものなんじゃないかなってね」

みのりは雄介の潤んだ瞳を見てもらい泣きをしていた。椅子に座っている雄介の頭を自分の胸で抱きしめる。

「私ね、雄介が高校のとき私を助けてくれたのが本当に嬉しかった。ちょっと古臭いかもしれないけど、白馬の王子様が現れたって本気で思ったんだ。だから雄介は自分自身のこと信じてあげて。不安になったらいつも私が傍にいるから。私の胸で思いっきり泣いていいから。……私はいつでも雄介を信じているよ」

雄介から一言「ありがとう」と声が漏れると、ただみのりは黙って泣き疲れるまで雄介を抱きしめていた。みのりの胸に頭をうずめて

泣いている雄介はまっさらな心でみのりに全てを預けていた。不安に押し潰れそうになった雄介はもっとも人間味があって、みのりはそんな雄介がたまらなく好きだったのである。

翌日の早朝に雄介及びみのりのケータイに非通知で一件のメールが届いた。なぜ二人のアドレスを知られたのか心当たりはない。ただわかっていることは社会を変えるとしてやってきた行動がばれているかもしれないということ。昨日の国会での事件が報道されたニュースを雄介が見ている後ろで、みのりはパジャマから着替えている。この事件は国際ニュースとして世界中で騒動を引き起こし、パニックに陥っていた。

同時に受け取ったメールを恐る恐る開くと、そこにはただ今日の夜中3時に大学の第一体育館まで来いという指示が書かれているだけだった。

「どうするの？もしこいつらが本当に私たちのしてきたことを知ってて世間に公表されたとしたら、やばいよ」

みのりはパジャマのボタンを外しながら涙目で後ろを振り返る雄介の目を見つめる。

「確実に死刑だな。行くしかない。そしてばらされる前にやるしかないな」

雄介は眉間にしわを寄せてみのりにこれから起こす行動の一部始終を伝えた。直接的に犯罪を起こすことはかなりのリスクだ。だからこそやりたくはなかった。しかし今はそうも言っていられない状況。決断を下すほかなかったのだ。

あらゆる状況を想定して準備を整える。こいつを亡き者にしさえすれば理想の社会を作ることに何の弊害もない。ただそれは自分たちの死とも隣り合わせだった。失敗すればこちらの身が危ない。ただ雄介たちはこれまで挫折を味わいながらトップに立ってきた。そんじゃそこらのエリート集団よりも苦境からの脱出は得意のはずだ。みのりが冷蔵庫から引っ張り出してきた大量のチョコレート菓子をほおばりながら頭の回転を上げることに全てを注いだ。

少しの仮眠を取り、午前3時。正門を飛び越えて第一体育館に到着する。大学の警備など甘いもので、この時間は警報にさえ気を付ければ通報される心配もない。文科系で部活に所属していない二人にとって、体育館に入るのは大学入学式以来初めてだった。そっとドアに手をかけるとなぜか鍵は開いている。あたりを警戒しながら中を覗いても誰かいる気配はなかった。二人でくっついて真ん中まで歩くが、何一つ変わったことはない。

「なるほどな。僕たち相手に奇襲をかけるつもりらしい。そろそろ姿を見せたらどうだ。僕たちは逃げも隠れもしない」

雄介は持参してきたねずみ花火に火をつけて中央のステージに向かって投げた。激しい複数の足跡がすると同時に鍵の閉まる音がした。足跡は雄介とみのりの目の前で立ち止まる。黒のライダーススーツで身を包んだ男女二人組は、雄介たちがよく知る人物だった。

「どうして私たちが呼び出したってわかったの？」

品のいい目元のはっきりした顔立ちの女は雄介を激しく睨んでいる。

「あいにく僕は友達が少ないし、友達とはパソコンでメールする主義なんだ。だからメモリーにはみのりとお前たち4人しか入っていなかった。それだけのことだ」

雄介の冷静かつ力強い口調に反応するかのように、男女二人組はフードを脱いで顔を露にした。その男女とは、かつて雄介たちが奈落の底に突き落としたはずの森一哉と倉田美幸だったのである。

「そこまでわかってるってことは当然外で佐々木と奥村がスタンバイしてることもわかってるんだよな」

「……もちろんだ」

雄介は森たちの様子を伺うように顔色一つ変えず淡々と答えた。倉田が長く伸びた前髪をかきあげると、額には深くこすったような傷跡が残っていた。

「あなたに付けられた傷。私はあの時あなたが仕向けた隼人君によって連れ去られた。そこであなたが作った……おそらく合成音声ね。それで一哉君が私利私欲のために私を誘拐した犯人だと思い込ませ

ることに成功した。案の定錯乱した私は一哉君を拒絶し、誤って転落したことによってあなたの目的でもあった一哉君の精神を崩壊させることができた」
　倉田は犯人を問い詰めるように冷静を装いながらゆっくりと話を展開させていく。雄介とみのりはただそれを表情を曇らせることもなく黙って聞いている。
「私はあの後ショックから一時的な記憶喪失に陥った。だけどたまたま外出して渋谷の街頭ビジョンで首相の記者会見を見に行ったとき、少し離れて観てたあなたたちを見て一気に記憶がフラッシュバックしてきた。そのときだったわ、美鈴から電話がかかってきてすべての真相がわかったのは」
　倉田はものすごい剣幕で雄介を睨む。それでも雄介は動揺するそぶりも見せず、毅然とした態度で沈黙を守っていた。話を続けようとする倉田を制止するように今度は森が言葉を続ける。
「それと同じ頃、廃人と化していた俺の元に失踪していた佐々木が自分の罪に耐え切れなくなって全てを自白しにきたんだ。それで再び俺たち４人でお前らの行動を尾行させてもらっていた。国会突入のときも変装して紛れ込んでな」
「美鈴と隼人君には図書館で待機してもらってる。いつでもあなたたちのことを公表できるようにね。最悪あなたたちと刺し違えてもいいと思ってる。もう逃げ場はないわ、観念しなさい」
　森と倉田がサバイバルナイフを持って構えた。それに対して一瞬の間があった後、こらえ切れないといった感じで雄介とみのりはお腹を抱えて笑う。何かの糸が切れたかのように。
「何がおかしい」
「今更隠すのもばかばかしいから言うが、お前らの言ってることは全て真実だ。ただお前らの馬鹿さ加減に呆れてしまったのさ。僕が何の対策もせずにここにのこのこと現れると思うか？」
「何追い詰められたからって負け惜しみ……」
　森が言いかけた瞬間、ズドーンという何かの爆発音と揺れを前方

に感じた。
「……何をしたの？」
「なあに、簡単なことだよ。最初からこうなることは想定していた。人は誰しもがいつ裏切るかわからない。ましてやお前らみたいな偽善者ならなおさらね。だからお前らをはめる作戦を伝えるときに超小型爆弾を彼らに取り付けておいたのさ。いつでも発動可能なね」
倉田は戦意を喪失したのかその場で跪き、ナイフを落とした。森も勝てないと思ったのかステージ裏に走り去ってしまう。
「森君、逃げちゃったけどどうする？」
「放っておけ。どうせあいつ一人じゃ何もできやしない。楽天的で薄情者でそのくせ臆病なのだから」
震えながらおどおどした表情で見上げる倉田の顔を雄介は蹴り上げた。敗者を見下すような目で雄介はしゃがみこみ、倉田の顔を愛撫する。これからオペの準備に取り掛かるかのように。
「さて、これだけ遊んでくれたんだ。お返しはしてあげないとな」
「それならきれいな顔を不細工に作り変えるなんてどうかな？」
「それも面白いが、最後くらい選ばせてあげようじゃないか。倉田、お前はどうしたい？」
髪を引っ張られ無理やり上を向かされた倉田の目から涙が流れ、目は死んでいた。瞬きもせず大きな瞳が今にも飛び出さんというおぞましい形相。黙っている倉田に対して何発かパンチを入れると、かすかに許してという声が嗚咽のような音で出ていた。雄介はにやりと笑う。
「この期に及んで命乞いか。まあいい、お望み通り最後に希望をやろう」
雄介はポシェットから一粒の錠剤を取り出し、掌に置いて倉田の口の前に差し出した。倉田はまるで犬のように掌に乗った錠剤を舌先で口に放り込む。
「一体何の薬だったの？」
「簡単に言えば麻薬の一種さ。ただ少々脳を破壊するスピードが速

いのと、禁断症状の副作用による苦しみが強いがな」
　倉田はひょこんと立ち上がりふらふらとラリったかのような意味のわからないダンスを始めた。数分踊り続けた後突然もがき苦しみだし、ライダーススーツを自らの手で引き千切っていく。伸びた爪で剥き出しになった肌を自ら傷つけ始めたのだ。倉田の瞳は真っ赤に充血している。
「この薬に侵されると理性はなくなり、本能だけで行動するようになる。それもあまりの苦しみに自傷行為を繰り返すようにな。倉田美幸が自ら命を絶つのも時間の問題だろう。みのり、帰って新しい社会の建設の構想を練ろう」
　ぷすっ。雄介は後ろを振り返った瞬間、針で刺されたような痛みを感じた。一瞬何のことかわからなかった。目の前が真っ暗になりただみのりのごめんねという声だけが聞こえる。そしてもうひとつ、後ろから大きな足跡が迫ってきた。それはすぐにさきほど逃げたと思われていた森のものだとわかった。
「ざまあねえな。さっき自分で言ってたじゃねえか。人は誰しもいつ裏切るかわからないって。それとも惚れた女だけは別だとでも思っていたのか？お前をはめるのに協力したら見逃してやるって言ったらあっさりＯＫしたよ。さすがに男より自分の命のが大事だったみたいだな」
　雄介が嫌いな、人をあざけ笑うような言葉が耳につく。はめられたことはすぐに理解できた。負けず嫌いな雄介はそれでも作り笑いで応答しようとする。
「まさかお前とみのりがつながっていたとはな。僕も迂闊だった。お前のことだからよほど僕に勝ったことが嬉しいんだろうな」
「そんなことないさ。ここまできてもお前は何か隠し持っているともわからないしな」
森はいつになく用心深く、悪魔のような心を持つ雄介に対して警戒する。みのりに雄介から持たされたポシェットとジャケットを捨てさせ、森がきつく雄介を後ろ手に縄で縛った。みのりと雄介はＴシ

ャツとハーフパンツだけの姿になる。
「お前は最後になっても表情一つ変えないんだな。今になっても恐ろしいよ。もっとまともなことに使えば俺に勝てたかもしれないのにもったいないな」
森の同情するかのような慰めに雄介は失笑して答えた。仮面の下に隠した悪魔のような形相を表に出して。
「僕は一度だって間違ったことをしたとは思っていないよ。そう、今でも。この国は腐ってる。建前や世間体ばかり気にして押さえつけられ、相手によってころころと意見を変える。口では平等と言いながら自分より下の者を見下し優越感に浸る。そんな偽善者ばかりの世の中だからこそ僕自らの手で壊さなければならなかったんだ。誰もやらないなら危険を犯してでもやる必要がある。違うか？」
雄介は訴えかけるように声を大にして言った。自分が正しい、自分こそが正義だと言い聞かせるように。森は呆れた表情で哀れみの言葉をかける。
「お前も本当はわかってたんじゃないのか？お前がもっとも嫌いな偽善や偏見をしてるのは実は自分自身だってことを」
「黙れ。僕は父とは違う。なぜ認めない？この国の変わるチャンスを僕が与えてやったんだぞ。少しは感謝するべきだ」
雄介の心からの声は虚しくその場に鳴り響いていた。薬の効果も切れかけて雄介の目が半開きになり、みのりに助けを求めようと倒れこんで頭がみのりの足に触れる。それに気付いた森は雄介の腹部を思いっきり蹴り、雄介は口から血を吐いた。
「こんな状況になってもまだ吉川にすがろうって言うのかよ。そう言えば俺も美幸をあんなにされた借りもあるしな。最後の情けだ。お前が愛する吉川の手で地獄に送ってやるよ」
森が目で合図を送ると、みのりは深く頷いて雄介の目の前でしゃがみこんだ。みのりは雄介の耳元で小さく囁く。雄介はにやりと笑みを浮かべた。
「……森、絶対零度って知ってるか？」

「なんだよ、遺言にでもするつもりか？まあいいや、冥土の土産に聞いてやるよ。絶対零度ってあれだろ？これ以上ない温度の下限、たしかマイナス２７３℃だったよな」
「そう、そして今までその絶対零度は人間の科学では絶対に産み出すことはできないとされてきた。しかし、僕の父はその絶対に不可能とされてきた絶対零度を人工的に作り出すことに成功したんだ」
淡々と話す内容には深みがあり、嘘を言っているようには聞こえなかった。森はこの衝撃の事実を前に興奮を露にする。
「そんなばかな。もしそんなことができたらノーベル賞ものだ。ニュースにもなってないじゃないか」
「当たり前だ。父はこの発明を発表する前に世間に知れたらやばいと思った上層部によって自殺に追い込まれたのだから。なんと言っても今までフィクションの中だけとされてきた完全なる冷凍保存、いわゆる不老不死が可能になるんだからね。お前も知っているんだろう？その上層部のうちの一人が奥村の父親だったのだから。お前はそのことを知り奥村を脅迫していた。違うか？」
森は興味津々といった様子で一歩だけ雄介に近づく。核心をついた雄介の言葉にはただ沈黙を保つほかなかった。その沈黙は雄介の言ったことが全て正しいことも意味している。動揺を隠せないというような仕草を見せると、雄介は不敵な笑みを浮かべ話を続ける。
「絶対零度は時を止める。つまりは人類の夢である時間旅行も可能になるんだ」
「だけど時間を止める理論は否定されたんじゃ」
「理論上は、な。父はどうしても納得がいかなくて否定されてもずっと研究をひそかに続けていた。そして見つけることができたんだ。あらゆる生命活動を止めながらにして生きることのできる方法を。父が自殺して三年が経ったとき、手紙と一緒に完成品が送られてきたことで僕はそのことに気付いた」
雄介が声を大にして語尾を強めると、みのりはパンティーの中に隠し持っていた小型の注射器を取り出し、自分の手と雄介の手に注

射を打った。するとたちまち二人の手先から血の気が引いていく。
「何をしてるんだ」
「ここまで話しといてまだ気付かないのか？打ったんだよ、自分たち自身に絶対零度の完成品を。なぜ絶対零度を作り出すことができなかったのか？それは絶対零度よりも低い温度など存在せず、しかも内部エネルギーを膨張させたところで一時的な絶対零度にしかなりえないからだった。父はそれを逆手にとってならば人間の体内に体温を完全に飛ばして凍らせるものを取り入れればいいと考えたんだよ」
　二人の体は見る見るうちに少しずつ凍りついていく。あまりの事態に森はうろたえを始めた。
「お前ら馬鹿だよ。そんなことしたら死ぬかもしれないんだぞ。大体吉川、お前は命ほしさに俺に協力したんじゃなかったのか？」
「何言ってんの？本気であんたなんかに心を売るわけないじゃん。最初から最期はこうなるかもって準備してたんだよ。私は雄介を裏切ったりなんかしない。絶対に」
　みのりは動けない雄介に代わって自ら凍っていない右手で雄介の頬を支えて唇を重ねた。みのりの瞳の中には雄介しか入れない領域が存在しているようだ。
「絶対零度の唯一の欠点であるいつ溶けるか操作する方法がないことについては父すら解明することが叶わなかった。しかし僕はいつか溶ける日がくると信じてる。そしてそのとき僕らは再び理想の新しい世界を作る。今度は誰しもが認めるような社会のトップとして君臨してみせる」
　二人が寄り添いながら下半身から凍結していくのを森はただ眺めているしかなかった。絶対零度はその名の通りこれ以上ない負の温度。どんな高温を持ってしても凍りつく二人を止める術など残されていなかったのだ。
「……負けたよ、お前ら二人には。なんだかお前らに失意のどん底に落とされたことなんてどうでもよくなっちまった。羽鳥には羽鳥

の想いがあって、俺には俺の想いがある。結局行き着くところは一緒だったんだよな」
「何が正義かが違っていただけ。そう言いたいんだろ？」
雄介はため息をつく。そして三人はあまりのおかしさに笑っていた。あれだけ敵対していたのにいつの間にか今になってお互いを理解し認めることができていたのだから。
「本当に時空を超えて未来で再生できたら教えてくれよ」
「教えてやるも何もお前は死んでいるだろ？」
「生まれ変わったらってことだよ。それに、もしかしたら俺が生きてる間に同じように絶対零度による冷凍保存が実現してるかもしれないし」
「そしたらどうせまた邪魔しに来るんでしょ？」
みのりは最後に満面の笑みを森に向かって捧げていた。雄介とみのりが初めて森に対して見せた本心の笑顔を最後に二人は寄り添うように凍りつく。氷彫刻のように鮮やかに美しい男女の姿は全てが終わったことを物語っていた。気が付くと外には朝日が照りだし、長い夜が明けたことを教えてくれた。

10

１０

あれから1ヶ月が過ぎた。あの日の一連の事件は大々的にトップニュースで取り上げられ、絶対零度に関連した雄介の父親のことも警察から事情聴取が入った。倉田は薬物中毒として病院に搬送され、森は全ての事件のいきさつを公表したことで大学を自主退学。とはいえ元がエリートだから起業の準備に大忙しなのだけれど。

大学の図書館からは爆弾により木っ端微塵になった佐々木と奥村の身に付けていた遺留品が発見された。雄介がプレゼントした龍をモチーフにしたピアスも奥村の腕時計とともにこげた状態で発見される。殺害こそが目的の爆弾であったため完全に粉砕することはなく、遺体の一部は遺され司法解剖の材料とされた。

雄介とみのりの凍った生き標本は警察の実況検分の後、絶対零度に興味を持った科学者の手に渡る。幾多の研究をしてきた名うての科学者たちでもこの実態のすごさに驚きを隠せなかったという。大犯罪者でありながらメディアでは最も美しい氷細工として取り上げられ、時には見世物として評価されるほど人気者となっていた。

偽善のない社会ってなんだろう？他人の気持ちを考えず自分を押し通すことか。それではただのわがままだ。私利私欲のためのボランティアを完全否定できるのか。それもひとつの方法と認める？本当に心の底からよいと思ってするのなら偽善ではないが、そんなこと実際にできるのだろうか。

何をするにも競争社会。人は何かと比べなければ自分の価値観を見出せないのかもしれない。だから差別や偏見を繰り返す。

価値観がまったく同じ人間なんてそういるもんじゃない。だから戦争もなくならないし、闘争も収まらない。完全に認め合うことなんて不可能なのかもしれない。

だけどそんな不完全な人間だからこそ誰かを必要とし、誰かに必要とされ歩いていく。人は弱い生き物だから自分をごまかしてでしか生きられないのかもしれない。だけど本当に必要とする人の前でだけ本当の自分をさらけ出す。そんな誰かを探すために人は生きているんじゃないか。

森はふとそんなことを考えながら病室で眠る倉田美幸の寝顔を見て、頬を指でつついていた。最後の最期に分かり合えた友に少しでも想いが届くことを願って。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5883i/

クーデター

2010年10月30日23時34分発行